

# 未来志向型「健やかな性」教育の実践報告

門脇 千恵<sup>1)</sup>，野本 ひさ<sup>1)</sup>，佐々木和義<sup>2)</sup>

1) 愛媛大学医学部

2) 兵庫教育大学教育学部

## A practice report of future oriented wholesome sex education

Chie KADOWAKI<sup>1)</sup>，Hisa NOMOTO<sup>1)</sup>，Kazuyosi SASAKI<sup>2)</sup>

1) Ehime University School of Medicine

2) Center for Research on Human Development and Clinical Psychology,  
Faculty of School Education, Hyogo University of Teacher Education

### はじめに

近年の社会環境の急激な変化に伴い、若者の性行動の活発化が指摘され、性に関する社会的な問題は深刻である(後藤他2001)。1999年に文部科学省は、「学校における性教育の考え方、進め方」という性教育の手引書を作成し、すべての小、中、高校などに配布した。現在、性教育は大学教育前のすべての教育現場で実施されているが、内容や機会の充実についてはばらつきが大きく、さらに大学教育においてはその指針すら明確でないのが現状である。性教育の原点は家庭であるとも言われているが(望月1996)、日本のほとんどの大人は、大人になるまで性を学ぶ機会が少なく、一体わが子にどのように性教育を行えばよいのか戸惑っている。もはや性教育の重要性はほとんどの国民が気づいていることであるが、その効果的な取り組みについて明確な答えはいまだ見当たらない。

筆者らは、平成16年度愛媛大学共通教育の授業の中で、エイズをはじめとする社会問題化した性感染症の問題解決に限定せず、現在の深刻な少子化に対して、未来志向型の「健やかな性」を目指した取り組みを実施した。その中で、大学生の性意識の実態に触れ、あらためて大学教育における性教育の意義が明らかになったので報告する。

### 性教育とは

WHO(世界保健機構)では性的健康を「個性、コミュニケーション、愛を建設的に豊かにしつつあるとともに、それらの価値を高めるようなやり方で、性的存在としての身体的、情緒的、知的、社会的各側面の統合をなしている状態」と定義しており、性教育は、性をもつ人間一人ひとりが基本的人権が守られ、安心、安全、自由で豊かな人間関係をはぐくむことができることを目的に行われる。健やかで豊かな人生を送るためには、すべての人々が性に関する正しい科学的知識をもち、身体と心の健康管理(自律)と社会的成熟(自立)ができ、豊かな人間関係を築き社会的存在として共生の力を養うことが重要である。

性教育の歴史は、1955年に当時の文部省から「純潔教育の進め方」が出されたことに始まる。この「純潔教育」が現在の「性教育」に至るまでにはおよそ半世紀を経ており、1999年に前出の「学校における性教育の考え方、進め方」という性教育の手引書により初めて「性教育」という言葉が公に使用された。2002年厚生労働省の調査(木原正博2002)によると、「若者は情報を求めており、重要なのは教える側の大人の役割である」と指摘されており、日本では性に関する社会的問題は、大人自身の性意識、性行動、人間関係に深く関連していると報告されている。これらの性教育の時期は、思春期に重点が置かれてお

り, 若年者への性教育の機会が学校外にも多くあるスウェーデンなどの諸外国に比べて, 日本では, 高校卒業以降の性教育の機会がないのが現状である。

## 本授業の概要

本授業は, 平成16年度前期共通教育主題別科目「生命の不思議」の1科目で, 受講人数は301名である。表1に本授業のシラバスを提示した。授業の目的は, 男女の健康問題を性の視点から考えることができること, リプロダクティブ・ヘルス/ライツ:産む性・産まない性について考えることができることである。授業の内容は, 生殖と出産, 出産を中心とした生活, 性に関する社会的現象を中心にトピックスを用意した。授業の方法は, 毎回の講義の後講義に関する感想と質問をB5の振り返り用紙に記入してもらい, 質問に関して翌週Q&Aで回答する形式をとった。

## 大学生の性意識

まず, 15回の講義のうち, 2, 4, 5, 6, 7,

8, 11, 14回の8回分のQ&Aから, 学生が性に関してどのような思いを抱いているのかを分析し, 大学生の性意識の実態について述べる。分析方法は, 8回分の振り返り用紙から授業内容に関する質問をすべて抽出し(計157), 質問の内容を内容分析によりカテゴリー化した。

学生が疑問に感じたこと, 聞いてみたいと思ったことは「性行動について」, 「生殖に関すること」, 「性感染症・避妊」, 「妊娠・出産」, 「赤ちゃんについて」, 「性役割について」5つのカテゴリーに要約された(表2)。この5つのカテゴリーは、『性に関する知識』と『性に関する考え方』に大別できる。『性に関する知識』, 特に性行動や生殖, 性感染症については, おそらくこれまでの性教育の中でも学んできた事柄であろう。しかし, 大学生になり性行動が現実感を帯びてきた現在, 非常に真剣にさらに具体的な知識を欲していることがわかる。特に避妊に関する質問や排卵のしくみに関する質問はどの回にもあり, 性行動や避妊は大学生の現実的な関心ごとでありながらどこにも解決の機会が与えられずにいることがわかる。知識不足や誤った知識は, 望まない妊娠や性感染症に直結する時期でもある。大学生に

表1 授業シラバス

授業題目	お互いの性を考える
授業の目的・到達目標	男女の健康問題を性の視点から考えていく。
1回目	教員の自己紹介, 授業ガイダンス 性とはなにか, 「上半身の性と下半身の性」 身体的, 社会的側面の両方の性について, 考えます。
2回目	「下半身の性」について
3回目	女の子に知ってもらいたい男の子の性, 男の子に知ってもらいたい女の子の性
4回目	「産む性, 産まない性」について 家族計画と受胎調節, 避妊について
5回目	ピルの解放とバイアグラ 男の子から女の子への思いやり
6回目	妊娠について 妊娠の成立と身体に現れる変化
7回目	どうしても産めないとき 人工妊娠中絶の身体とこころのリスク
8回目	妊娠と知ったときの心と身体の準備 妊娠中の過ごし方
9回目	子ども(胎児)の発達について
10回目	結婚について 社会生活を営むための男女の役割
11回目	女性と男性が子どもを持ちながら働き続けるために
12回目	男女共同参画社会と保育問題
13回目	解放された性
14回目	同性愛, シングルマザー, ドメスティックバイオレンス
15回目	幸せな人生を送るために 男女のお互いの性を理解するために

表2 学生の性意識 (Q & A より)

カテゴリー	主 な 内 容
性 行 動 について	マスターベーション 男女の違い 精通, 射精 性行為について
生 殖 に関すること	排卵のしくみ (基礎体温・ホルモン・月経) 妊娠・出産のしくみ 人工妊娠中絶
性感感染症・避妊	避妊具について ピルの使用について
妊娠・出産	妊婦の生活 妊婦のからだ 出産について
赤ちゃんについて	胎児の生命 赤ちゃんのからだ 母子手帳
性 役 割 について	女性の就業 子育て ドメスティック・バイオレンス

こそ性に関する正しい知識を学ぶ機会が重要なことが明らかになった。『性に関する考え方』では、妊娠や出産に対して感動したり、男女の違いについて知ることでお互いをいたわりあえる気持ちになったりと前向きな考え方が伺える。また、性差別に関する様々なトピックスに対する驚きや怒りもあり、大学生の健全な性に対する考え方が感じられた。

### 男子学生と女子学生の 子育てに対する考え方

12回目の講義 (男女共同参画社会と保育問題) の振り返り用紙から、子育てに関する男子学生と女子学生の考え方を分析した。この講義は、実際の子育ての体験を写真や育児用品の現物、モデル人形などを用いて説明しながら、子育てについて考えてもら

うことをねらいとした。分析の方法は、学生の書いた振り返り用紙全体の頻出語句であった「赤ちゃん・子ども」、「子育て」、「役割」、「協力」、「父親・母親」、「家族」、「子育てグッズ」をキーワードとし、キーワードが書かれた文章を抽出した。記入された表現によっては文意を読み取り、キーワードの内容を示している言葉についてはキーワードに置き換えた。1文の中に2つ以上の意味を含んでいる文章については、意味ごとにカウントした。キーワードに関する文は計320文あり、これらの内容を内容分析によりカテゴリー化した (表3)。

子育てに対する内容は『赤ちゃん』、『性役割』、『出産・子育て』、『その他』の4つのカテゴリーに分かれた。『赤ちゃん』について、「かわいい」「好き」と肯定的にとらえた学生は、男子学生20.6%、女子学生17.0%であった。「苦手」「こわい」と否定的にとらえた学生は、男子学生6.9%、女子学生8.5%であった。『性役割』について「父親の子育て参加に賛成」と答えた学生は、男子学生26.5%、女子学生37.6%であった。「子育ては母親のみが行うべきだ」と述べた者も、男子学生3名、女子学生も1名いた。『出産・子育て』については、「自分もしたい」と感じた者が、男子学生30.4%、女子学生27.0%、「したくない・こわい」と否定的にとらえた者が、男子学生2.0%、女子学生4.3%であった。また、「子育てすることは大変だ」と感じた者が、それぞれ8.8%、19.1%であったが、この回答はほとんどの者が「大変だ」しかし「頑張ってみよう」という文脈になっていた。『その他』で多かった記述は、「自分の家族 (親) や自分の子供時代の思い出」、「育児用品への興味」などであった。

子育てについて、全体的に肯定的に考えている学生が多く、特に「赤ちゃんがかわいい」、「自分も子

表3 振り返りノートによる男子学生と女子学生の子育てに関する思い

カテゴリー	主 な 内 容	男子学生 N=102 (%)	女子学生 N=141 (%)
赤 ち ゃ ん	赤ちゃんがかわいい・好き 子供は苦手・こわい	21 (20.6) 7 (6.9)	24 (17.0) 12 (8.5)
性 役 割	父親の子育て参加に賛成 父親は外で働き子育ては母親がする	27 (26.5) 3 (2.9)	53 (37.6) 1 (0.7)
出 産 ・ 子 育 て	自分も子育てがしたい・子どもがほしい 子育てはしたくない・こわい 子育ては大変なことだ	33 (30.4) 2 (2.0) 9 (8.8)	38 (27.0) 6 (4.3) 27 (19.1)
そ の 他	自分の家族・子どもの頃を思い出した 育児用品について	7 (6.9) 6 (5.9)	32 (22.7) 12 (8.5)

育てをしたい」と感じた者は女子学生より男子学生の方が多かった。授業を通して子育ての実際を知ることにより、「自分も子育てをしたい」と子育てに前向きな気持ちを示している。女子学生も子育てに肯定的な意見をもっているが、男子学生に比べて現実的な問題として認識しているようで、「子育てが大変だ」、「父親も子育てに参加してほしい」と考える者が男子学生よりも多かった。また、感想の中には「男の人が熱心に子育てや家事に参加することが実際にあるのは初めて知った。主夫の存在はテレビドラマの中だけの話だと思っていた。」というような内容も複数あり、大学生にも旧来の性役割に基づく価値観が根付いていることが伺える。しかし、男子学生も女子学生も、「父親が子育てに参加することに賛成」と述べていることや、男子学生の「子育てをしたい」という結果から、今後の社会をつくっていく若者達に期待を感じた。

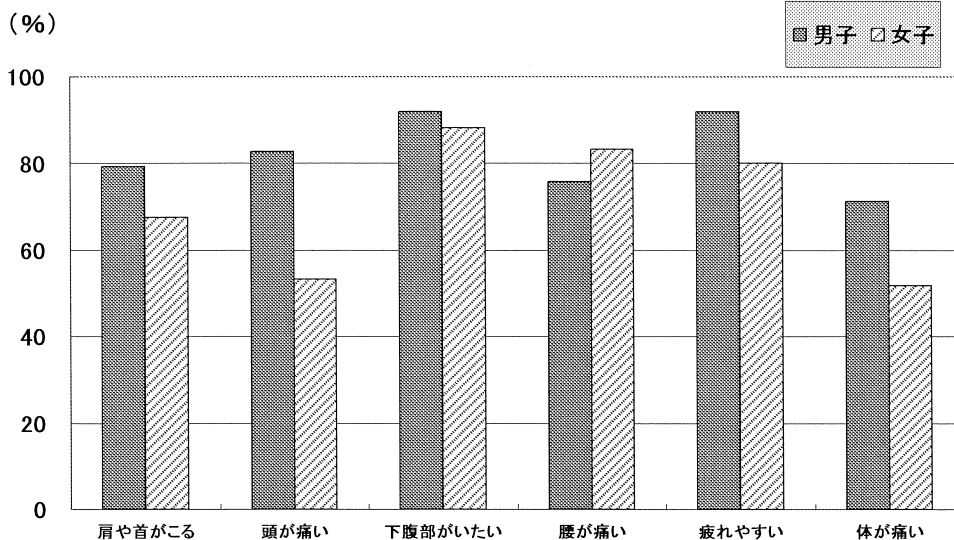
## 月経に関する意識調査

お互いの性について知る見地から、性周期(月経)に伴う心身の症状に対して、女子学生がどのような実態を示し、男子学生がどのようなイメージを抱いているかの実態調査を行った。

調査は Moos(1968)の開発した月経関連症状尺度：MDQ (Menstrual Distress Questionnaire) の日本語版(茅島1984)を使用した。MDQは「痛み」6

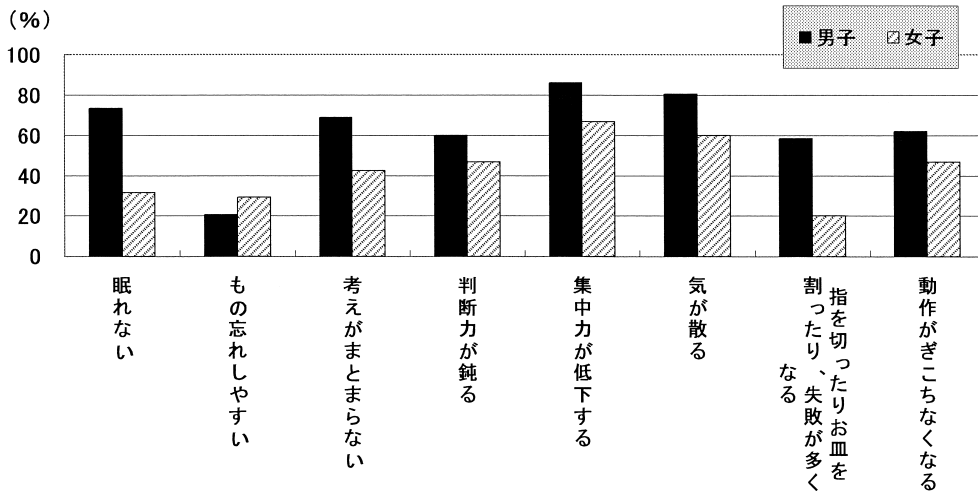
項目、「集中力」8項目、「行動の変化」5項目、「自律神経失調」4項目、「水分貯留」4項目、「否定的感情」8項目、「気分の高揚」5項目、「コントロール」6項目、「その他」1項目、計46項目の月経関連症状から構成されており、質問項目は、それぞれ「強い(3)」、「中くらい(2)」、「弱い(1)」、「なし(0)」の4件法で回答を求めている。男子学生には、女性の月経中の随伴症状の有無について「はい」、「いいえ」の2件法で求めた。質問紙の配布は、学生に調査の趣旨を説明し賛同を得たのち質問紙を配布し、その場で記入、回収した。回収率は71.1%。有効回答率は95.8%であった。分析方法：男女別に各項目ごとに平均評定値と標準偏差を求めた。

図1～8に、MDQ得点の男女比較を示した。男女で大きく差違がみられた因子は、「集中力」、「自律神経反応」、「否定的感情」であり、この3因子については、女子学生の実態に対して、男子学生より多く「あると思う」と答えていた。また、「水分貯留」以外のすべての因子について、女子学生の実態よりも男子学生が「あると思う」と答えている割合が高く、男子学生の月経随伴症状に関する知識は、女子の実態と多少のずれはあるものの、女子学生の月経について、いたわりの反応を示していることが分かった。



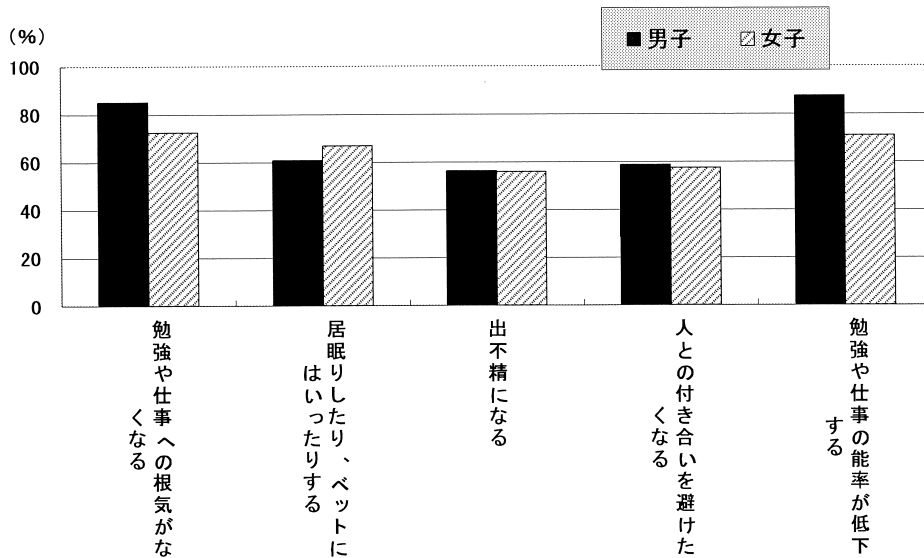
男子：月経随伴症状があると思う項目，女子：月経随伴症状のある項目

図1 月経随伴症状 (MDQ)：痛み因子



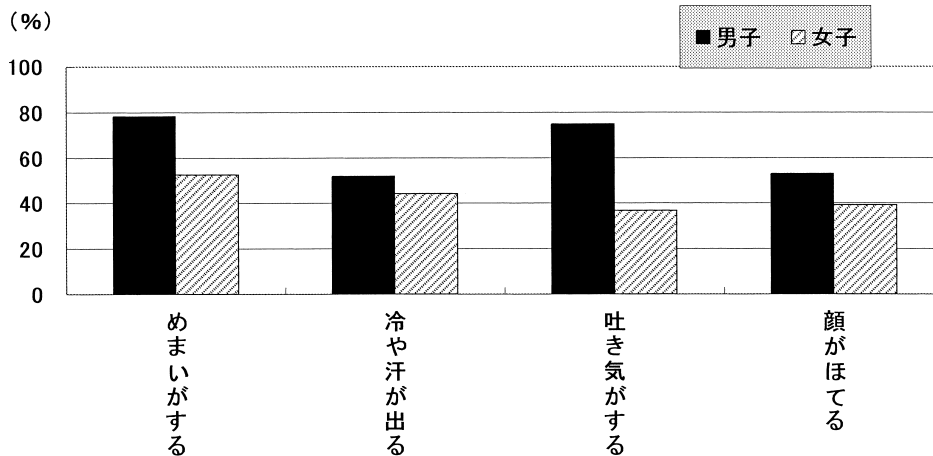
男子：月経随伴症状があると思う項目，女子：月経随伴症状のある項目

図2 月経随伴症状 (MDQ)：集中力因子



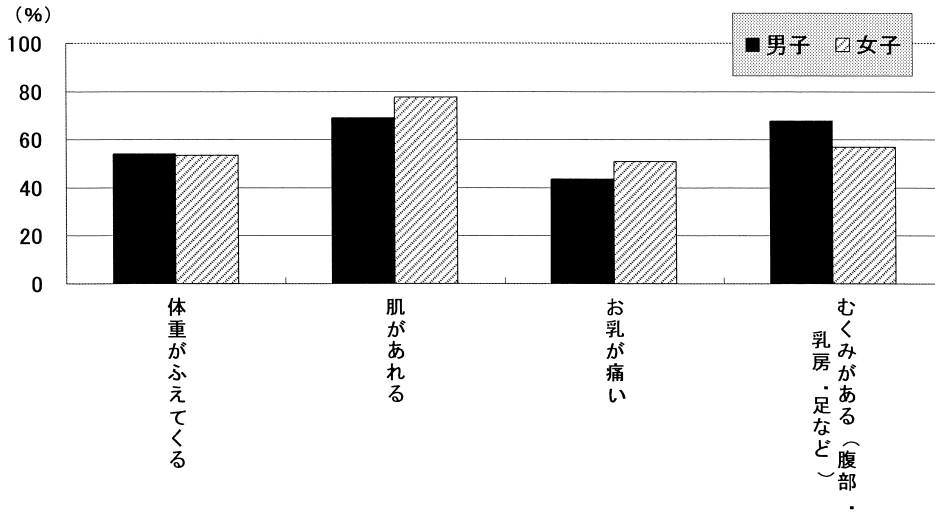
男子：月経随伴症状があると思う項目，女子：月経随伴症状のある項目

図3 月経随伴症状 (MDQ)：行動変化因子



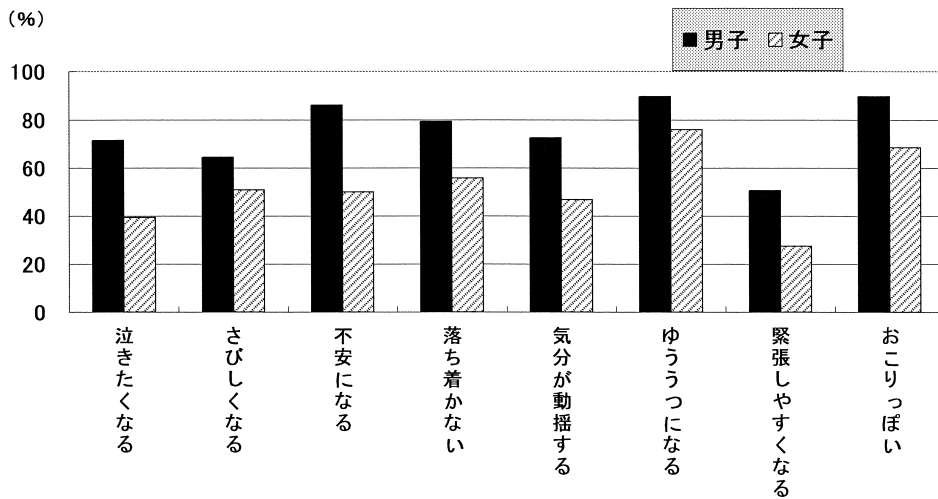
男子：月経随伴症状があると思う項目，女子：月経随伴症状のある項目

図4 月経随伴症状 (MDQ)：自律神経系反



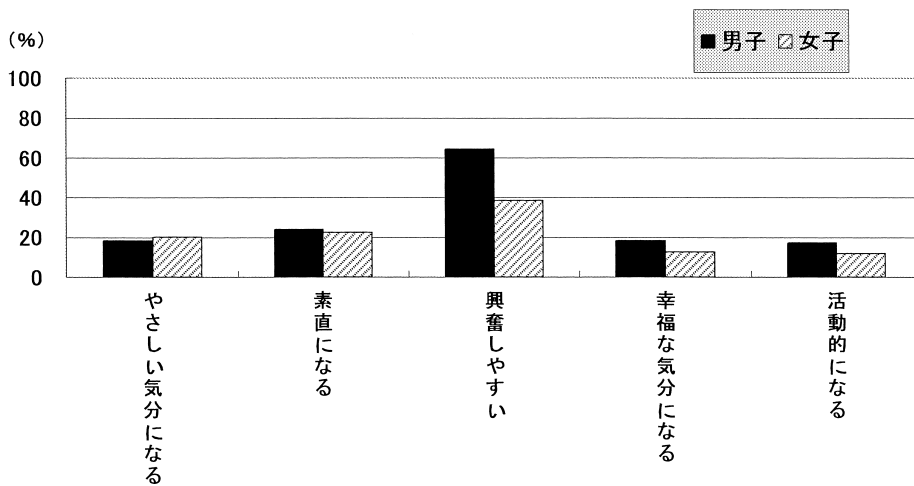
男子：月経随伴症状があると思う項目，女子：月経随伴症状のある項目

図5 月経随伴症状 (MDQ)：水分貯留因子



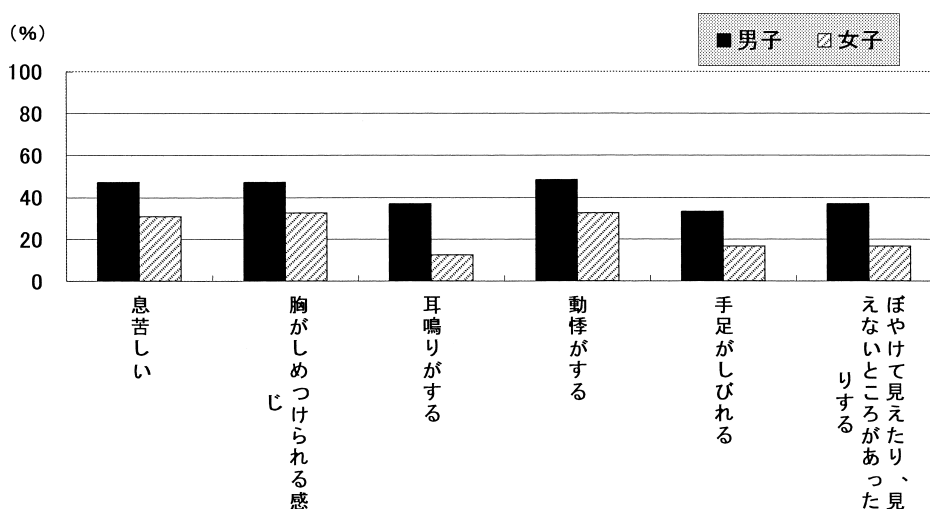
男子：月経随伴症状があると思う項目，女子：月経随伴症状のある項目

図6 月経随伴症状 (MDQ)：否定的感情因子



男子：月経随伴症状があると思う項目，女子：月経随伴症状のある項目

図7 月経随伴症状 (MDQ)：気分の高揚因子



男子：月経随伴症状があると思う項目，女子：月経随伴症状のある項目

図8 月経随伴症状 (MDQ)：コントロール

## まとめ

今回の取り組みで、大学教育における性教育の意義が明らかになった。高等学校で学ぶ性教育の指導指針には「学校における性教育の進め方、考え方」として①性自認や性の多様性、②性の商品化、③性被害・性暴力、④性情報、⑤性の悩みの5項目が挙げられており、主に社会問題に対する問題解決意識を喚起しようと目されている。また、大学教育における性教育は、エイズ問題をトピックスにして行われることが多く、これもまた性の問題から発展しているという特徴がある。しかし今回、産み、育てることに重点を置いた性教育授業の展開を行い、それに対する学生の反応を分析すると、男子学生も女子学生も、非常に素直に、前向きに、結婚、出産、子ども、子育てについて考えていることがわかり、未来はとても明るいような気がした。しかし、社会では超少子化の問題が増々深刻化している。一体この問題の根源がどこにあるのだろうか。このことは真剣に究明する必要性を感じている。また、学生の感想の中に「これまで(性について)色々なことを習ってきてよく知っているつもりだったが、まだまだ知らなければならないことがたくさんあると思った。」とあるように、大学生は、小、中、高の積み重ねを経て、現在まさにタイムリーに必要な知識として、性に関する正しい知識を求めていることが明らかになった。

大学教育における性教育はまだまだ発展の途にいたばかりであるが、今回の結果を、今後の性教育

活動への指針としたい。

## 引用文献

- 茅島江子，前原澄子，木村昭代：「性周期における愁訴の分析」、『母性衛生』25，p.332-340，1984。
- 木原正博：「HIV感染症の動向と予防介入に関する社会疫学的研究」、『厚生労働省』，2002。
- 後藤あや，郡山千早，安村誠二他：「日本における人工妊娠中絶の近年の動向」、『厚生指標』48(5)，p.19-25，2001。
- 望月良美：「高校生の活動特性と性意識・性行動からみた性教育に関する一考察」、『思春期学』17(2)，p.204-209，1996。